

# 北海道雄武高等学校

課程 全日制  
 学科 普通科  
 生徒数 96名

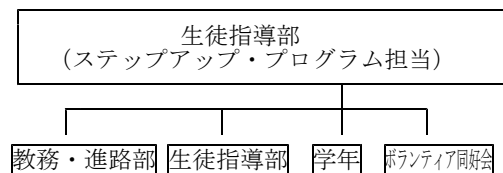
## 1 取組の特徴

ピア・サポートトレーニングをHRや全校生徒、ボランティア同好会の活動などに取り入れ、校内外におけるサポート活動や小・中学生との交流を通して、より良い環境づくりに取り組んでいる。

## 2 取組のねらい

幼少期から固定的な友人関係や人間関係に悩み、自尊感情の低い生徒が多く見られることから、ソーシャルスキルトレーニングを行い、自尊感情を高め、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指すとともに、不登校や中途退学の未然防止に努める。

<組織図>



## 3 取組の経過

- |  |  |
|--|--|
| <p>4月 児童センターでのピア・サポート<br/>             (毎月1回実施)<br/>             ピア・サポート研修会 (年間11回実施)<br/>             仲間理解とコミュニケーション(2学年)<br/>             仲間理解 (1学年)<br/>             自己理解と自己分析 (3学年)</p> <p>5月 話の聞き方 (1学年)<br/>             インターンシップに向けた問題解決<br/>             (2・3学年合同)<br/>             「アセス」・「ほっと」の実施 (全学年)</p> <p>6月 集団カウンセリング (1学年)<br/>             仲間理解・自己理解、問題解決 (1学年)</p> <p>8月 講師によるトレーニング (1学年)</p> | <p>9月 講師によるトレーニング (3学年)<br/>             「アセス」の実施 (全学年)<br/>             コミュニケーショントレーニング (1学年)<br/>             小・高交流会 (小3・4・高1)</p> <p>10月 集団面接の傾聴と表現 (3学年)<br/>             価値観と他者理解 (3学年)</p> <p>11月 アンガーマネジメント (3学年)<br/>             ピア・サポート (紙上相談) (3学年)<br/>             講師によるトレーニング (1・2学年合同)<br/>             中学生へのピア・サポート活動</p> <p>12月 講師による校内研修 (教員)</p> <p>1月 非言語コミュニケーション (1学年)<br/>             部・局・同好会リーダー研修</p> <p>2月 「アセス」・「ほっと」実施 (1・2年)</p> |
|--|--|

## 4 取組の内容

### 1 生徒理解に向けた取組(「アセス」・「ほっと」の実施)

昨年同様に5月・9月・2月に「アセス」、9月・2月に「ほっと」を実施し、前年度との比較と時間経過及び成長の度合いや「要サポート」者の変化や分析をし、生徒個人及びHRの状況などの理解に努め、個別面接に活用した。

第1学年については、「アセス」「ほっと」の結果を、5月と9月とで比較したところ、「友人サポート」「非侵害関係」の項目が上昇した。

第2学年は、クラス編成により約半数の入れ替えがあり、昨年度は「ほっと」のSS50を下回る項目が多かったが、今年はほとんどの項目においてSS50を越えた。

第3学年は昨年度の「ほっと」で「みんなの意見をまとめることができる」の項目について、男子SS41.8、女子SS37.5であったのが、男子SS47.6、女子SS55.1と大きな成長を見せた。また、「学業」では全体がSS40.1からSS50.5に上昇し、落ち着いた学習環境が整ったことが伺えた。

## 4 取組の内容

### 2 インターンシップに向けたピア・サポート活動（5月） 2・3学年合同

- (1) ねらい：3年生と一緒にインターンシップに向けた問題と課題解決をして、就労意識の確認と就労準備につなげる。
- (2) 内容
  - ア 名刺交換・・・2年生は「名前」「体験希望職場」「選択理由」「将来の希望職業」を伝え、3年生は「名前」「体験職場」「職場選択理由」「将来の希望職業」を伝えながら名刺を渡した。
  - イ 体験談を話す・・・2年生は質問を考えながら3年生の体験談を傾聴した。
  - ウ 質問・・・3年生は2年生からの質問に対し、実習時のことを思い出しながら回答をした。
  - エ スキルの確認・・・2年生は3年生から職場が求めていることなどを確認した。
  - オ 電話の仕方・・・2年生は3年生から事業所への電話のかけ方を学んだ。

#### (3) 成果

- ア 名刺交換をしたことがなく、2・3年生にとって良い体験であった。
- イ 3年生は就労体験の再確認をし、2年生は職場への疑問点を考えることができた。
- ウ 2年生は疑問点の解消をすることができた。
- エ インターンシップの心構えを確認できた。
- オ 糸電話で電話のかけ方を体験できた。



### 3 外部講師によるピア・サポート学習会（8月・11月・12月）

8月は学年別（1・3年）による学習会にてコミュニケーションのスキルアップを行った。

11月は1・2学年合同による学習会で異年齢とのコミュニケーションや他者理解することができた。

12月は対立の解消法について教員研修会を行った。



### 4 小・中におけるピア・サポート活動（9月・11月）

雄武高校を会場に、高校1年生が小学校3・4年生と「あいこジャンケン」「ジャンケン貨物列車」「自作のサイコロトーク」「良いところ探し」などを行った。生徒は受け入れ準備や司会進行のすべてを行い、小学生に配慮したピア・サポートをすることができた。

また、11月には放課後に中学校でボランティア同好会員等（サポーター）によるピア・サポート交流活動を行った。

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- ア 中途退学者はいなかった。
- イ 上級生の効果的なリーダーシップや不登校生徒の受け入れがスムーズに行われた。
- ウ 欠席平均3.9人から3.1人・遅刻生徒、保健室での休養・処置・相談件数の激減。
- エ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により生徒全体のコミュニケーションスキルの上昇と同時に、「アセス」から「友人サポート」「非侵害的關係」の上昇が見られた。
- オ 学習活動及びリーダー活動において積極的な発言が見られた。
- エ 小・中学生や地域との交流を通して、相手のことを考えた言動が見られた。

### 2 課題

- ア トレーニングの活用を促す教育活動にて、コミュニケーションスキルの向上と定着を推進する。
- イ アンケートによる困り感の早期発見、個別対応によるスキルアップと支援の充実を図る。

### 3 次年度に向けて

- ア トレーニングを活かした場面設定の推進。
- イ 近隣校と連携した実践活動の推進。
- ウ どの教員も生徒へのトレーニング実施を可能にする。

# 北海道留辺蘂高等学校

課程 全日制  
 学科 総合学科  
 生徒数 123名

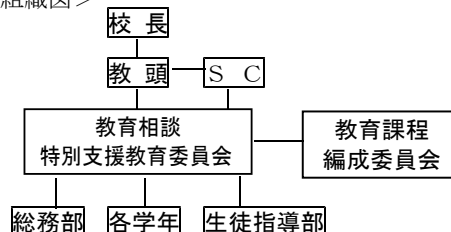
## 1 取組の特徴

一連の事業5年目の本校は、校外研修等で身に付けた集団カウンセリングのスキルを積極的に活かしたコミュニケーショントレーニングを実施している。学級担任だけではなく、副担任や教頭、特別支援コーディネーターなども学級に入ってトレーニングを展開しており、外部講師の指導を仰ぎながら、教員主導で対人関係スキルや自己有用感の向上に力を入れている。

## 2 取組のねらい

- 1 校内外の研修を通して身に付けた、コミュニケーションスキル育成トレーニングツールの蓄積促進及び、全ての教員が構成的グループエンカウンター等を実践できる体制づくり、さらには、そのスキルを活用した教科指導を促進する。
- 2 「ほっと」や「アセス」の分析と効果的な活用について研修を進め、教員のスキルアップを図る。

<組織図>



## 3 取組の経過

- |  |   |
|--|---|
| <p>4月・担任による入学式後及び学級開きでの集団カウンセリングの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・宿泊研修における集団カウンセリング</li> </ul> <p>5月・1,2年生「アセス」1回目の実施と分析</p> <p>6月・上級学校バス見学会の学級発表会開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教頭による集団カウンセリング(1年)</li> <li>・S Cによる個別カウンセリングの開始</li> </ul> <p>7月・副担任による集団カウンセリングの実施</p> <p>8月・集団カウンセリング研修会への教員派遣</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担任による集団カウンセリングの実施</li> </ul> | <p>9月・1,2年生「アセス」2回目の実施と分析</p> <p>10月・担任による集団カウンセリングの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1,2年生「ほっと」1回目の実施と分析</li> <li>・「ようこそ先輩」まとめ</li> </ul> <p>11月・外部講師による取組支援と講評</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員研修会(SGEの演習)</li> </ul> <p>12月・集団カウンセリング研修会へ教員派遣</p> <p>2月・1,2年生「ほっと」2回目の実施と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・総合学科研究発表会</li> <li>・高校生ステップアッププログラム事業における成果の検証と次年度計画作成</li> </ul> |
|--|---|

## 4 取組の内容

- 1 教員主導の集団カウンセリング(1年生:4/8、4/9、4/23、4/30、6/18、7/23、8/27、10/8)
  - (1) ねらい 人間関係づくりのエクササイズや傾聴トレーニングを実施し、生徒の自己有用感とコミュニケーションスキルを高める。
  - (2) 内容 特に、話しを聞く姿勢ができていない傾向にあったため、学級担任をはじめ副担任や教頭によるコミュニケーショントレーニングを早い段階から実施した。「伝言ゲーム」「怒りの温度計」「すごろくトーク」「フルーツバスケット」「ひざたたき」などを活用。
  - (3) 成果 生徒から「人とふれ合えて楽しかった」「相手の気持ちが分かるのはいい」「人を好きになった」などの感想があり、生徒同士の新しい人間関係づくりのきっかけとなり、自己理解の深まりも期待できた。反面、「そのときだけの関係」と感じている生徒もいることから、信頼関係を結ぶための日常生活に根ざしたエクササイズが求められる。



教頭によるSGE

## 4 取組の内容

### 2 学級担任による集団カウンセリング(1年生:11/19)

- (1) ねらい コミュニケーショントレーニングを通して、生徒の他者理解を深めるとともに、講師(中野武房教授)のアドバイスを受けて、今後の実践に活かす。
- (2) 内容 「すごろくトーク」でエクササイズの意欲を高めてから、「わたしの長所と短所は」をペアワークで取り組んだ。
- (3) 成果 実施した内容について、中野教授から多くの助言をいただき、今後の指導の改善につながる、有意義な時間となった。  
(助言内容)「ねらい」や「ルール」を明確にすること。コミュニケーションの基本(傾聴姿勢、話し方等)を日頃から指導すること。指導案と発問の文言を同じにする方が良い等。



学級担任によるSGE

### 3 教員研修会(11/26)

- (1) ねらい 生徒のコミュニケーション能力を育成するために、構成的グループエンカウンター等の演習を通して、教員自身の実践力を身に付ける。
- (2) 内容 本校教諭による「ブラインドウォーク」などのアクティビティを、生徒になったつもりで体験し、どのように取り混ぜるのが効果的かを学んだ。
- (3) 成果 演習することで取り混ぜ方のポイントをつかむことができ、「自分もやってみよう」という意識が高まった。中野教授から「全員参加でこのような研修に取り組めることが素晴らしい。」との言葉をいただき、今後の励みとなった。



教員研修会

### 4 「ほっと」と「アセス」の実施と結果の分析(1・2年生)

「ほっと」を10月と2月の2回、「アセス」を4月と9月の2回実施し、分析を行った。各アセスメントをもとに担任面談を実施することで生徒理解が進んだ。

### 5 各教科での取り組み

トレーニングで身に付けたスキルを活用して、国語、数学、外国語、理科、地歴、保健体育、家庭、福祉、芸術など、ほとんどの教科で積極的な取組を行った。ペアワークやグループワーク、シェアリングなどは日常的に行われており、協力し合って問題解決しようとする姿や、お互いの考えから自分の考えを深めようとする姿が見られた。また、表現の苦手な生徒に対して生徒同士助言やアドバイスをを行うなどピアサポート活動が展開されている。

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- ア 中途退学者が昨年度より減少した。
- イ 一人当たりの欠席日数が昨年度より減少した。
- ウ 入学当初は協調や我慢することができず、中学生気分の残っている1年生であったが、学校祭の経験やトレーニングを重ねることで、仲間と共に活動したり、相手を喜ばせたりすることができるようになった。また、欠席や怠学傾向もかなり減った。
- エ 1年生の「ほっと」2回目の結果では、13要素のうち「自律」では4.5ポイント、「参加」「拒否」「称赞」「学業」「相談」では2~3ポイント増となった。
- オ コミュニケーションを意識した活動(ペアワーク・グループワーク・ピアサポート等)が、各教科で積極的に取り組まれた。
- カ 「ほっと」「アセス」の結果を基に担任面談を実施し、必要に応じてスクールカウンセラーとの面談につなげるなど、円滑で組織的な取組ができた。
- キ 生徒自らコミュニケーションの重要性を感じ、生徒会が主体的に友達や教員とのコミュニケーションを深めようとする「Noケータイday」が提案された。

### 2 課題

- ア 生徒同士のふれあいをコミュニケーショントレーニングの時だけで終わらせない。
- イ コミュニケーションスキルを育む機会としてのピアサポート活動、ボランティア活動をさらに深めていく。

### 3 次年度に向けて

- ア 校外研修等への参加促進と校内研修の充実を図り、トレーニングができる教員を増やしていくとともに、生徒の状況に応じた効果的なトレーニングが展開できるようにする。
- イ トレーニングで身に付けたスキルを活用できるよう、教科での取組を深めていく。



# 北海道北見工業高等学校

課程 全日制  
 学科 工業科  
 生徒数 378名

## 1 取組の特徴

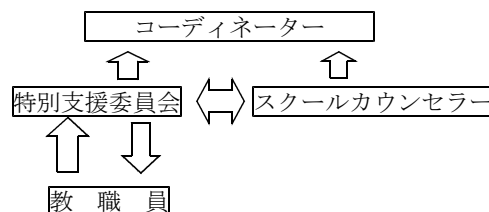
- ・工業科の特色を生かした、学科単位のきめ細かい指導体制
- ・就業体験や工場見学の機会を生かした実践的なコミュニケーション能力の育成  
 「ほっと」を活用したより深い生徒理解と生徒情報の共有

## 2 取組のねらい

本校の卒業生のうち、約75%が就職しており、企業からも、専門性を持った即戦力として期待されている。そのため、実際の社会生活に生きるコミュニケーション能力を高めることが重要になっている。

また、本校は例年中途退学者が多く、適切な人間関係の構築によって、中途退学者数を減らすこともねらいとしている。

<組織図>



## 3 取組の経過

- |   |   |
|---|---|
| <p>4月 全クラス教科担任会議<br/>ケータイ教室</p> <p>6月 コミュニケーション講座 (宿泊研修)<br/>工場見学 (宿泊研修)<br/>生徒意識調査<br/>工場見学 (3学年)<br/>現場体験学習 (3学年)<br/>全クラス教科担任会議</p> <p>8月 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング<br/>北工フェスティバル</p> | <p>10月 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング<br/>講演 植松努氏</p> <p>11月 「ほっと」実施<br/>就業体験 (2学年全員)</p> <p>12月 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング<br/>生徒意識調査 (学校生活アンケート)</p> <p>1月 課題研究発表会<br/>進路体験発表会</p> <p>2月 人権教室<br/>スクールカウンセラーによる職員研修(教育相談)</p> |
|---|---|

## 4 取組の内容

4月 「ケータイ教室」

携帯電話の正しい使い方を学び、ネットトラブルを未然に防止する取組。KDDIの講師の方をお招きして、分かりやすい内容で講演を頂いた。

インターネットへの不用意な書き込みや、トラブルの事例を紹介していただき、たいへん有意義な講演となった。



## 4 取組の内容

### 1 「コミュニケーション講座」

宿泊研修（6月）を利用して、コミュニケーション講座を開催した。今回は「友達ビンゴ」を使って、他のクラスの知らない生徒同士がコミュニケーションを取り合い仲良くなることをねらいとして実施した。

プログラムの中で、多くの生徒が積極的にコミュニケーションを取る姿が見られた。生徒の感想にも「他のクラスに友達が出来て嬉しい」とあり、学年のつながりを強くすることができた。



### 2 「人権教室」（2月）

「いじめ等の人権問題について考え、相手への思いやりの心や生命の大切さを学ぶ」ことをテーマに人権教室を開催した。講師として、北見人権擁護委員協議会から人権擁護委員の方をお招きした。生徒たちは、いじめが相手の心に深い傷を負わせることを改めて学ぶことができた。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

#### ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は昨年度10名、今年度現時点で8名となった。不登校生徒数は昨年度0名、今年度は2名である。次年度は、特に中途退学者を減らすことを意図した取組を行う。

#### イ その他の指標による評価

保健室の利用者が昨年比10%増、保健室相談者も10%増となった。来年度は担任や学年・学科を中心に、教育相談の機会を増やし、改善に努める。

#### ウ 「ほっと」実施による生徒のコミュニケーションスキルの実態把握

「ほっと」の活用により、各クラスの傾向と変容の把握が進んだ。継続して実施する。

#### エ 生徒の変容

- ・ 1学年は、宿泊研修をきっかけに生徒同士のコミュニケーションが活発になった。
- ・ 2学年は、職業体験に全員参加し、職場で必要なコミュニケーション能力を学習した。
- ・ 3学年は、課題研究発表で、大勢の前で課題研究の成果を発表するとともに、コミュニケーションスキルの成果を発表した。

### 2 課題

ア 集団研修を行える人材を見つけることが難しい。また、遠方のため招聘する予算がない。

イ スクールカウンセラーに対する生徒や保護者の認知が低く、周知徹底が必要である。

ウ 生徒にとって居心地の良い学校・学級にするために様々な方策を講じたい。

## 北海道新得高等学校

課程 全日制  
 学科 普通科  
 生徒数 63名

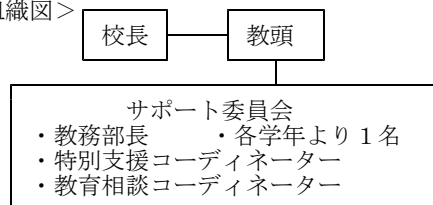
### 1 取組の特徴

昨年度から引き続き本事業を通じ、コミュニケーション能力を高めることにより、集団生活において問題を解決する力や、良好な人間関係を構築する力を身に付ける。

### 2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションの苦手な生徒への少人数トレーニングや生徒理解。
- 2 子ども理解支援ツール「ほっと」の有効活用のため、専門家による研修会を実施し、生徒指導に活かす。

<組織図>



### 3 取組の経過

- |   |                      |
|---|----------------------|
| 4月 宿泊研修「コミュニケーションスキル」①                    | 10月 「しんとくふれあい広場」     |
| 5月 子ども理解支援ツール「ほっと」① 1年<br>「コミュニケーションスキル」② | 10月 小集団スキル「フレンドシップ」③ |
| 6月 面談週間 1年                                | 11月 小集団スキル「フレンドシップ」④ |
| 6月 校内研修会「ほっとの有効活用」について                    | 子ども理解支援ツール「ほっと」③     |
| 6月 子ども理解支援ツール「ほっと」②                       | 12月 クリスマスツリー点灯式      |
| 6月 小集団のスキル「フレンドシップ」①                      | 1月 全町教育「なかよし学習塾」     |
| 7月 全町教育「なかよし学習塾」                          | 1月 リーダー研修会「ピア・サポート」  |
| 8月 「コミュニケーションスキル」③                        | 1月 茶道部 保育所訪問         |
| 9月 小集団スキル「フレンドシップ」②                       | 2月 小集団スキル「フレンドシップ」⑤  |

### 4 取組の内容

- 1 校内研修会 子ども理解支援ツール「ほっと」の有効活用について  
 講師 北海道医療大学大学院心理科学研究科博士課程 新川 広樹 氏

①ねらい 「ほっと」を活用して、より良い生徒指導を考える。

②対象 教員

③内容 「ほっと」を生徒指導に活かすため、高めるターゲットスキルの目標を教員で共有し、スモールステップによる成功体験の積み重ねをサポートすることやできたときは具体的に褒めることについて

④成果 「ほっと」の結果からピア・サポートの能力がある生徒を伸ばすことで、助け合い、高め合う集団へと導くことができた。



## 4 取組の内容

### 2 函館大谷短期大学 中野 武房氏による

「コミュニケーションスキル」

- ①ねらい 専門家による演習を通し、早い段階で生徒のスキル向上と良好な人間関係を形成する力を指す。
- ②対象 1年生（29名）
- ③内容 4月、5月、8月の3回実施。  
町内小中養護教諭が演習を生徒と一緒に参加し、コミュニケーションスキルの必要性を体験した。
- ④成果 不登校等の予防を図るため、早い時期に実施グループ学習で問題行動の解決の仕方について話し合うことにより、他者理解や「相手の気持ちになって行動すること」の大切さを学んだ。町内の養護教諭も小中学校時にコミュニケーションスキルを学ぶことの大切さを高校生と交流をする中で理解した。



### 3 小集団のコミュニケーションスキル「フレンドシップ」

講師 スクールカウンセラー 大道 まき子 氏

- ①ねらい コミュニケーションの苦手な生徒へのコミュニケーショントレーニング及び生徒理解。
- ②対象 部活動生徒（バスケット、茶道、吹奏楽、ボランティア）
- ③内容 自主的に参加する態度の育成や相互に理解をするマナーの実践等（5回）
- ④成果 演習を繰り返すことにより、話すことに慣れ自信をもって発言したり、部活動で教え合いや励まし合うなど自発的な行動がみられるようになった。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
  - ・中途退学者や不登校生徒数は特に大きな変化はないが、夏休み前の退学者が毎年1～4名いたが、本年度は0名であった。
- イ その他の指標による評価については特になし。
- ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
  - ・「挨拶や感謝」、「仲間づくり」の対人関係の数値が高い
  - ・3回目の「ほっと」では「リーダーシップ」の項目の数項が顕著に高くなった。
- エ 生徒の変容した姿
  - ・専門家や担任による取り組みにより、ピア・サポート能力がある生徒を伸ばすことで、問題行動へのクラス全体の対応力を高め、望ましい人間関係が育成されつつある。

### 2 課題

- ア 「ほっと」の結果について教員間で共有する体制が必要である。
- イ 教科・科目との関連づけや、コミュニケーションスキルトレーニングの取組との連携を十分に図る必要がある。

### 3 次年度に向けて

- ア 「ほっと」の分析及びコミュニケーションスキルの効果的な指導を組織的に行う。
- イ 小集団のコミュニケーションスキルを継続して行う。



## 北海道釧路明輝高等学校

課 程 全 日 制  
 学 科 総合学科  
 生徒数 595名

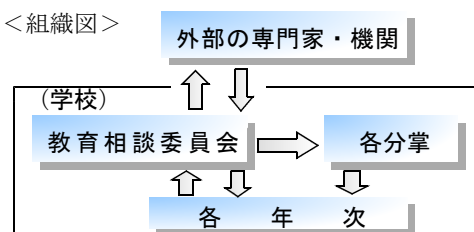
### 1 取組の特徴

生徒自身が自己理解及び他者理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を図るため、構成的グループエンカウンター（SGE）や集団カウンセリングなど様々なエクササイズを実施する。さらに、個別の面談を重視し、年間で複数回実施するとともに、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実を図る。その際、「Q-Uテスト」や「ほっと」などを活用し、予防的な見地に立って生徒の小さな変化にも目を向けていく。また、生徒間はもとより生徒と教師との良好な人間関係を構築するとともに、学校やホームルームに対する帰属意識を高めるため、教員の教育相談に関わるスキルアップを図ることをねらいとした研修会を実施する。

### 2 取組のねらい

一人一人の生徒を大切にしている積極的な生徒指導を推進し、様々な取組を通して生徒にコミュニケーションスキルを身に付けさせることにより、生徒の人間関係づくりのスキルアップや教職員の教育相談に関する指導力の向上を図るとともに、不登校やいじめの未然防止を図る。

<組織図>



### 3 取組の経過

#### 4月～5月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報の収集
- ・宿泊研修におけるリレーションシップトレーニング(1年次)
- ・個別面談による生徒の現状や家庭環境の把握及び学校生活における不安や悩み等の聞き取り(全年次)
- ・生徒情報の共有(教員間)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学習の実施
- ・SGE「コミュニケーションゲーム」の実施(1年次)
- ・SGE「わくわくレジャーランド」の実施(2年次)
- ・Q-Uテストの実施(全年次)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(全年次)

#### 7月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・個人面談による学校祭前後における友人関係の変化や不安、悩み等の聞き取り(全年次)

#### 8月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

#### 9月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

#### 10月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学習の実施

#### 11月

- ・Q-Uテストの実施(全年次)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(全年次)

#### 12月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

#### 1月～3月

- ・SGE「1年の計は元旦にあり」(1年次)の実施
- ・「ほっと」の実施
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・次年度に向けたアンケートの実施(1、2年次生及び教員対象)
- ・今年度の事業評価

## 4 取組の内容

### 1 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 塚本 久仁佳氏・遊佐 賢子氏）

- (1) 日 時 平成26年5月30日（金）から随時実施
- (2) ねらい 生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、安心して学校生活を送れるように支援する。
- (3) 対 象 希望生徒又は保護者
- (4) 内 容 ア 生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言  
イ 生徒又は保護者へのカウンセリングの結果に関わる教員への助言
- (5) 成 果 カウンセラーの助言により、生徒理解を深めるとともに、生徒個々に対する教員のカウンセリングのスキルアップを図ることができた。
- (6) 課 題 日常的な生徒観察や、「ほっと」やQ-Uテストなどの結果をもとにカウンセリングの対象生徒を決めているが、教員間での情報共有を一層深めることにより、対象生徒への効果的なタイミングでのカウンセリングとする必要がある。

### 2 集団カウンセリング（外部講師 三島 利紀氏）

- (1) 日 時 平成26年8月20日（水）
- (2) ねらい 生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため年次毎に集団カウンセリングを実施し、人間関係づくりを支援する。
- (3) 対 象 1、2年次生徒
- (4) 内 容 各年次の生徒に対する集団カウンセリング
- (5) 成 果 生徒は集団カウンセリングの実践を通して、自己理解を深め、他者理解のためのコミュニケーションの大切さを理解することができた。
- (6) 課 題 日常的に人間関係づくりを支援する必要があることから、継続した取組とする必要がある。



(集団カウンセリングの様子①)

(生徒の感想から)

- ・「画面に映る文字は誤解を招くことがあるが、面と向かって話すことによって相手のことがより理解できるので、会話がいかに大切かが分かった。」
- ・「よりよい人間関係をつくる上で必要なものを学ぶことができた。これから、今回学んだ「察する」、「感じる」ということを実践していきたい。」



(集団カウンセリングの様子②)

- ・「誰かと協力して何かをする時に、どのようにしたらうまくできるかを考えることや、相手の気持ちになって考える、相手を信頼することが大切だと思った。これからみんなで何かする時に、相手のことを考えて行動するようにしようと思った。みんなで楽しくできて良かった。」
- ・「人を信頼することはとても大切でとても難しいということに気付いた。高校生活は本当にあっという間に過ぎていくので、友達と良い信頼関係を築いていきたい。」

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

#### (1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移

- 中途退学者及び転出者は減少傾向である。生徒に対しては、担任及び養護教諭等がきめ細かに個人面談を行い、悩みを一人で抱え込むことのないように対応しており、早期から学校の支援体制の中で指導を行うことができている。

年 度	22	23	24	25	26
中途退学者数	2	3	1	1	2
転 出 者 数	2	4	4	2	1
合 計 数	4	7	5	3	3

(平成26年度は、平成27年1月末現在)

#### (2) その他の指標による評価

- スクールカウンセラーがほぼ毎月来校し、生徒との個別カウンセリングを実施するとともに、各年次における個別面談の充実により、保健室へ外科・内科的要因を除き相談を目的として来室する生徒が前年度75人（平成26年1月末現在）から今年度64人（平成27年1月末現在）と減少している。

#### (3) 「ほっと」から把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- 全体の「要素偏差値」は50.0以上あり、安定した数値であることから、集団として落ち着いているといえる。
- 2年次については、前年度同時期に実施した数値と比べ、12項目中9項目で数値が上昇しており、クラス替え後のクラスにも慣れ、学習面や人間関係などに自信をもって学校生活に臨んでいる様子が窺える。本校生徒の特徴として大きな人間関係の崩れなどは見られないことが挙げられる。その点について、関係因子の「関係維持」が高い一方、「仲間強化」が低い数値を示すことから、平穏な人間関係を作ることはできているが、意見のぶつかり合いなど正面から友人と関わる機会が少ないのではないかと考えられる。

#### (4) 生徒の変容した姿

- スクールカウンセラーによるカウンセリングを経た生徒が、「今まで自分が悩んでいたことは悩まなくてもいいことだ」と自分を変えるきっかけを見つけ、それ以後教室で友人とコミュニケーションをとる際に、大変楽な気持ちで接することができるようになっていた。
- 生徒は、教員以外の異なる立場の人から異なる言い方でアドバイスをもらうことにより、自己理解・自己変容につながるきっかけになることを認識していた。
- カウンセリングを受けた生徒の中には、その後担任等との面談で、「気持ちが前向きになるきっかけをもらった」と口にする者も数名いた。

### 2 課題

#### (1) 集団カウンセリングを継続した取組にする必要がある。

- (2) 悩んでいても気付かないケースやスクールカウンセラーによるカウンセリングにつながらないケースがまだ見受けられることから、生徒のいわゆる「小さなサイン」を見逃さないよう教職員の一層の意識改革が求められる。

### 3 次年度に向けて

- (1) 今年度は、スクールカウンセラーによるカウンセリングを効果的に行うことができ、生徒の悩みに十分対応することができた。今後は校内研修等で教育相談の手法を学び、組織的な教育相談を行う必要がある。
- (2) 「Q-Uテスト」については生徒の状態把握等に活用することができたが、「ほっと」についてより一層効果的な活用を図る必要がある。
- (3) 朝の職員打合せ等において「研究指定事業ニュース」を教職員に周知することなどにより、事業推進に係る適切な進行管理を行う必要がある。
- (4) 本事業における取組と本校の教育活動の中核を占めるキャリア教育に係る取組や生徒指導及び特別支援教育に関する学校経営方針との融合を図り、本事業の終了後も継続的に積極的な生徒指導を推進するよう工夫する必要がある。

# 北海道白糠高等学校

課 程 全 日 制  
 学 科 普 通 科  
 生 徒 数 1 8 6 名

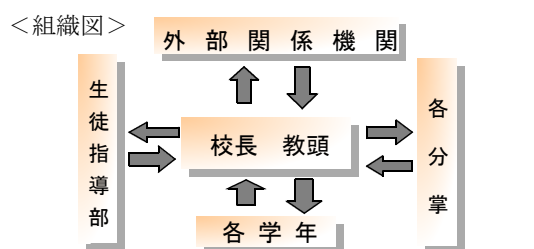
## 1 取組の特徴

- ・ 教員と生徒、さらには生徒同士の信頼関係を深めるための取組を計画的に実施する。
- ・ 外部機関等と連携し、コミュニケーションスキルを高めるための校内研修を積極的に行う。

## 2 取組のねらい

本校は、生活面や学習面で課題を抱える生徒が多く入学し、また人間関係がうまくいかずに第1学年の途中で進路変更する生徒が多い。

こうした課題を踏まえ、本事業を活用し、コミュニケーション能力や自己表現力の育成に主眼を置いた校内研修や講演会、個別カウンセリングを実施し、コミュニケーションスキルの向上を図る。



## 3 取組の経過

4月	・ 早期の中学校訪問による生徒情報の共有 ・ 全校一斉個別面談の実施 ・ 外部講師を招いての集団カウンセリング (第2学年)	12月	・ 地域住民とのそば打ち交流 ・ 体育祭を通してコミュニケーション能力を向上させる取組
5月	・ Q-Uの実施及び分析を踏まえた個別面談	1月	・ 宿泊研修における集団カウンセリング (グループエンカウンター) の実施 (第1学年)
6月	・ 「赤ちゃんふれあい交流」 (2回) (第3学年)	9月～11月	「ピアサポートを学ぼう！」の開催 (全3回)
7月	・ 学校祭を通してコミュニケーション能力を向上させる取組	4月～3月	「サポステの日」を設定 (全16回)
10月	・ スクールカウンセラーによる講義 (第1学年) ・ スクールカウンセラーによる生徒理解のための校内研修会	5月～2月	スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング
11月	・ 外部講師によるQ-Uについての校内研修会	8月～10月	幼稚園との交流 (2回) (第3学年)
		7月～10月	養護学校高等部との交流 (3回) (第3学年)

## 4 取組の内容

### 1 スクールカウンセラーによる講義「心・ストレスマネジメント」

(講師：北海道教育大学 安川 禎亮 氏)

- (1) 対 象 第1学年
- (2) ねらい 心の仕組みがわかるとともにストレスマネジメントの方策を学ぶ。
- (3) 内 容
  - ・ 人の心の在り方についての理解
  - ・ 呼吸法による感情のコントロール
- (4) 成 果 緊張したりイライラしたりする時など、この呼吸法を取り入れることにより、感情をコントロールしようと取り組む生徒が増加した。





## 2 スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング

(北海道教育大学 安川禎亮氏、北海道公立学校カウンセラー 若菜順氏)

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 自己の抱える問題を明確にすることで自己理解を深め自己肯定感を高める。
- (3) 内容 月2回程度、カウンセリング希望生徒を対象に、教育相談室で個別のカウンセリングを実施した。
- (4) 成果 生徒はスクールカウンセラーに悩みを聴いてもらうことを通して、自己理解を深めることができた。また、教員は、放課後のカンファレンスを通して、生徒理解について学ぶことができた。

## 3 「ピア・サポートを学ぼう！」の学習会の開催 (全3回)

(くしろ若者サポートステーションスタッフ)

- (1) 対象 全校生徒及び教職員 (希望者)
- (2) ねらい コミュニケーション能力を高め、生徒同士で支援する力を付けるためのスキルを学ぶ。
- (3) 内容 コミュニケーション能力を高めるエクササイズ及びアサーショントレーニングを体験する。
- (4) 成果 不登校経験のある生徒によるロールプレイやサポステスタッフの援助により、生徒は自己理解及び他者理解を深めることができた。

※ くしろ若者サポートステーション (通称：サポステ) との連携

平成25年9月から月に1、2回程度、在学中から卒業後を見据えた生徒の居場所づくりを目的に、「サポステの日」を設定。サポステスタッフが休み時間等に生徒の話や話を聴くなど、進路学習の協力等をしてきている。

## 4 宿泊研修における集団カウンセリング (グループエンカウンター) の実施

- (1) 対象 第1学年
- (2) ねらい 生徒の相互理解と仲間作りを推進し、ホームルーム内及び学年としての良好な人間関係の構築を図る
- (3) 内容 ネイパル足寄スタッフによる集団カウンセリング
- (4) 成果 ホームルームや学年への帰属意識が高まり、生徒の相互理解や集団づくりに効果があった。



グループエンカウンターの様子

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) 本事業を推進することにより、第1学年において、中途退学者数が減少した。
  - ・ H23年度：25人 → H24年度：15人 → H25年度：17人 → H26年度：8人
- (2) その他の指標による評価 (保健室年間利用統計より～「友人関係の相談」で保健室を利用する生徒の減少)
  - ・ H24年度：203人 → H25年度：182人 → 平成26年度：89人
- (3) Q-Uを実施し、分析することにより、生徒と教員との信頼関係を築くことができた。
  - ・ 第1学年の要支援群の生徒 (9.5%) に対して細かに項目を分析し、担任、養護教諭及びカウンセラーによる面談、また学年団による声かけを継続して行った。学級不満足群の生徒が約7割いたことから、全ての生徒に対して担任による個別面談を実施した。生徒一人一人と信頼関係を築くとともに、ストレスマネジメントの講義やグループエンカウンター等を実施した。
  - ・ 第2学年では、要支援群の生徒はいなかったが、学級満足群についてはホームルームによって差があったことから、担任による全ての生徒への個別面談や、グループエンカウンターを実施した。また、見学旅行などの学校行事を通して、望ましい集団づくりに努めた。
- (4) 生徒の変容した姿
  - ・ 本校では、自己表現を上手にできない生徒が多くいたが、ステップアッププログラムの取組を通して、少しずつではあるが、我慢する・話を聴く・話をする姿勢が身に付いてきた。第1学年及び第2学年では、地域連携や異校種と連携した行事において、身に付けたコミュニケーションスキルを生かし、他者と積極的に関わる生徒の姿が見られるようになった。

### 2 課題および次年度へ向けて

- (1) スクールカウンセラーの支援による効果は非常に大きいことから、次年度以降もスクールカウンセラーの派遣を強く希望する。
- (2) 多様な生徒がいるため、Q-Uを効果的に活用するための研修会を継続して行う必要がある。

## 北海道釧路東高等学校

課程 全日制  
 学科 普通科  
 生徒数 438名

### 1 取組の特徴

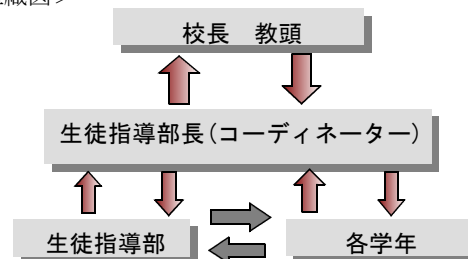
生徒のコミュニケーションスキルの向上を図り、良好な人間関係づくりが行われるよう、特に第2学年のクラス替えの時期における人間関係づくりを良好に行うことができるよう、学校組織体制の充実を図る。

### 2 取組のねらい

コミュニケーションスキルや自己表現力を生徒に身に付けさせることにより、コミュニケーション能力の不足により生じる人間関係のトラブル等を自ら解決し、良好な人間関係を構築できるようにする。

また、多様な生徒に対応するため、生徒への相談活動を充実させ、校内体制の充実を図る。

<組織図>



### 3 取組の経過

通年 ピア・サポート (希望生徒)

- 4月 宿泊研修(第1学年)  
家庭訪問(第1、2学年)  
「ほっと」1回目(第1学年)
- 6月 花壇ボランティア(第3学年)  
校外清掃(第1学年)  
交通安全教室(全学年)  
Q-Uテスト1回目(第2学年)

- 8月 「ほっと」、Q-Uテストに関わる研修会  
校外清掃(第2学年)
- 9月 人権教室(第1学年)
- 11月 リーダー研修会(生徒会)  
花壇ボランティア(第3学年)
- 12月 思春期保健講座(第1、2学年)  
「ほっと」2回目(第1学年)  
Q-Uテスト2回目(第2学年)
- 1月 教育相談研修会
- 3月 次年度に向けた分析

### 4 取組の内容

#### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

- ・第1学年において、7月と11月に実施した。
- ・7月に実施した「ほっと」においては、全体的に「緊張」が低く、コミュニケーション能力が十分に身に付いていないと思われる生徒が多い結果となった。
- ・その結果を踏まえ、第1学年では、学校祭や人権教室等の学校行事を通して、コミュニケーションスキルの向上を図った。
- ・11月に実施した「ほっと」においては、「礼儀」、「忠告」、「率先」、「学業」の向上と、生徒のコミュニケーション能力の向上が見られた。

## 4 取組の内容

### 2 Q-Uテスト（8月と12月に2学年で実施）

第2学年で実施したQ-Uテストの結果において、8月に実施した第1回目では「非承認群」に属していた生徒のうちの多くが、12月の2回目の検査結果では「学校生活満足群」へ移動していた。1回目の検査の後に実施した校外清掃活動やスクールカウンセラーによる教育相談、外部講師による思春期保健講座により、多くの生徒にコミュニケーションスキルが身に付いた結果と考えている。

しかし、ホームルームによっては、依然として「要支援群」の生徒が一定数いることから、生徒に応じたきめ細かな教育相談による対応や、スクールカウンセラーの一層の活用等が必要である。

### 3 宿泊研修における構成的グループエンカウターの実施

- (1) ねらい 入学直後の宿泊研修において、グループエンカウターを実施することにより、生徒のコミュニケーションスキルを向上させ、良好な人間関係を構築する。
- (2) 対象 第1学年
- (3) 内容 ネイパル厚岸の職員の指導により、4種類のグループエンカウターを行った。
- (4) 成果 生徒間の相互理解が深まり、コミュニケーションスキルが身に付いた。



### 4 ピアサポート

- (1) ねらい 生徒をピアサポーターとして養成し、生徒同士での相談活動の充実と、コミュニケーション能力の向上を目指す。
- (2) 対象 希望生徒
- (3) 内容 放課後にピアサポートエクササイズを1～2種類実施する。
- (4) 成果 生徒からは「このような触れ合いが大事だと思った」、「自分の意見を伝える難しさを知ったので、相手の気持ちにも配慮したいと思った」などの感想があり、生徒のコミュニケーション能力の深まりが見られた。



### 5 花壇ボランティア

- (1) ねらい 富原地区の美化活動を通じて、奉仕の心を育てる。
- (2) 対象 第3学年
- (3) 内容 土をおこし、花壇に花を規則的に並べる。
- (4) 成果 他者とコミュニケーションをとりながら、花壇作りをすることにより、他者を思いやる気持ちや、1つのことに全員で取り組むことの大切さ等について学ぶことができた。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) 本事業を推進することにより、中途退学者及び保健室における相談者数が減少した。
  - ・中途退学者：H25年度：8名 → H26年度：3名
  - 保健室年間相談者：H25年度：328名 → H26年度：252名
- (2) スクールカウンセラーが20時間配置されたことにより、心身に不安を抱える生徒の相談に対応することができた。
- (3) ピアサポーターを養成し、生徒同士の相談活動を充実させたことにより、生徒のコミュニケーション能力が向上した。

### 2 課題及び次年度に向けて

- (1) 多様な生徒がいることから、「ほっと」やQ-Uテストを一層活用し、生徒のソーシャルスキルトレーニングを進める必要がある。
- (2) 人間関係のトラブルにより不登校や別室登校、進路変更をする生徒が一定数いることから、一層の生徒理解と教職員間による情報共有が必要である。